

日语本科学位论文撰写要求

格式：（具体参照例文所示）。

1. 论文全篇除一级标题外，字体一律五号，1.5 倍行距。日文用 MS Mincho 字体，中文用宋体。一级标题请使用三号加粗字体。其他标题为小三号加粗字体
2. 日文每段开头缩进一个字符。中文空两个中文字符。全文两端对齐。
3. 文中引用采取每页脚注的方式，每页重新编号，编码一律使用①②③。脚注所需信息如下：
作者.作品名（如有译者，请放入括号）.出版社，出版年份.页码
（中间间隔点号，出版社后加逗号）
4. 正文（不包括中日文摘要，目录）字数约 6000~9000 字，不得少于 6000 字。
每一章另起一页，各小节之间无需分页。
5. 页码只加在正文的下方（扉页，封一，封二，封三，封四不需要），页码按照阿拉伯数字连续编排。页码位于页面底端，居中。
6. 本论文体例中的具体内容仅供参考。红体字一律不出现在论文中。

内容及顺序：

1. 论文首页（具体要求见所附样稿扉页）
2. 诚信声明（见封一）
3. 内容提要（中文摘要）字数约 350 字左右，不包括关键词及谢辞。（见封二）
4. 要旨（日文摘要），内容必须与中文一致。（见封三）
5. 目录。（见封四）
6. 正文包括以下内容：
はじめに（序论：长度为半页以上，这部分不要使用章节序号）
本文（论文不少于 2 章，各章按需分小节展开论述，标题格式见目录页）
おわりに（结论：长度为半页以上，这部分不需要使用章节序号）
参考文献（可均为日文文献，也可中日文均有，但不可仅有中文文献。）

样稿（论文扉页）

论有岛武郎的自然描写

——以《生来的烦恼》为中心

(上空五行，用宋体、三号加粗字体)

上海外国语大学继续教育学院

日语专业

XXX

指导老师:XXX

XXXX年XX月

(具体空行如上，用宋体小四，文字居中，年月为定稿日期)

封一

上海外国语大学继续教育学院

学士学位论文诚信声明

(一级标题居中，加粗，小三号字，宋体，与下文之间空1行)

(中文每段首行空2个中文字符，宋体，小四号，全文两端对齐。)

本人郑重声明：我所呈交的学士学位论文是在指导教师指导下独立完成的。本论文正文中除已标明引用出处内容外，不包含任何其他个人或集体发表的研究成果内容。本人明白并完全承担在论文中引用他人科研成果而不注明出处的严重后果。本人提交给上海外国语大学继续教育学院的查重报告真实有效，如有不实，本人将承担由此带来的一切后果。

特此声明。

声明人签名：_____

日 期：_____

(此页可下载使用。签名及日期的内容不得打印，需用黑色钢笔亲手书写。)

论有岛武郎的自然描写

——以《生来的烦恼》为中心

内容提要

有岛武郎是一位对于大自然具有强烈感受性和敏锐观察力的作家。这种与生俱来的能力从他的几部代表作中的自然描写中可见一斑。此外，有岛还是一位非常重视象征表达的作家，他小说中的自然描写，尤其是对“海”的描写引人注目，饱含深意。众所周知，美国诗人惠特曼是对有岛的人生起到重要作用的人，他众多文学作品的背后都有着惠特曼的影子，尤其是小说中对“海”这一意象的设置，很明显是受到了来自于惠特曼的影响。有岛从惠特曼的诗歌中获取了怎样的暗示和启发？经常出现在惠特曼诗歌中的“海”到底在有岛的小说中发挥了怎样的作用？这是本论文研究的课题。本论文主要选取了有岛的代表作《生来的烦恼》为研究对象，深入解读和分析其中“海”这一意象的含义。

本论文共由五章构成（包括前言，正文的三章和结语）。正文主要分为三个部分。第一章回顾有岛和惠特曼之间在文学上的“邂逅”，提出惠特曼诗歌中的有关“海”的意象。第二章通过具体作品提出有岛作品中自然描写，以及对“海”这一意象的运用。第三章围绕作品《生来的烦恼》深入探讨其中“海”的深意。

关键词

有岛武郎；自然描写；生来的烦恼；海

谢辞

本文在写作过程中得到了 XXX 老师的悉心指导，在此表示诚挚的感谢。

（论文题目用宋体小三黑体字，上方空一行。其余用宋体小四，黑体字见例文。

详细说明论文的主题思想、各章节结构、内容和结论，字数约 350 字；日文与之相应，整体长度为 1 页）

封三（日本語） 有島武郎の自然描写を論ずる

——『生まれ出づる悩み』を中心に

要旨

有島武郎は自然に対し、強い感受性と鋭い観察眼を持つ作家である。この生まれつきの素質は諸篇の代表作に描かれた自然描写から読み取ることができる。そのうえ有島武郎は象徴的表現を重んじる作家でもある。小説における自然描写、特に「海」に関する描写はとても印象的であり、意味深い。一方周知のように、アメリカの詩人ホイットマンは有島武郎の人生に最大の影響を及ぼした人である。有島文学の根底にもホイットマンの思想が力強く波打っていた。同じように有島武郎の小説における「海」のイメージ設置においては明らかにホイットマンを導き手としたところが大きい。ホイットマンの詩に深い感銘を受けた有島武郎がどのようにホイットマンに示唆されているのか、ホイットマンの詩によく登場した「海」のイメージはどのように有島武郎の小説に機能しているのか、それが小論の研究課題である。小論は主に『生まれ出づる悩み』を研究対象とし、中の「海」のイメージについて詳しく分析していきたい。

小論は主に三つの部分に分けられている。第一章では有島とホイットマンとの出会いを遡り、ホイットマンの「海」を提出する。第二章では有島の作品における自然描写、特に「海」の登場を見る。第三章では『生まれ出づる悩み』を中心に「海」というイメージの深意を追求する。

キーワード

有島武郎；自然描写；生まれ出づる悩み；海

謝辞

小論作成にあたり、指導教官のXXX先生から、丁寧なご指導を賜りました。この場を借りて、深く感謝の意を表します。

はじめに	1
第一章 有島武郎とホイトマン	2
1.1 有島武郎とホイトマンとの出会い	2
1.2 ホイトマンの「海」	4
第二章 有島武郎の自然	6
2.1 象徴を重んずる作家	6
2.2 『カインの末裔』における自然	7
2.3 『ある女』における「海」	9
第三章 『生まれ出づる悩み』における「海」	10
3.1 「海」の登場	10
3.2 「海」と『生まれ出づる悩み』のモチーフ	12
3.3 ホイトマンの「海』とのかかわり	14
おわりに	15
参考文献	16

（目录中标题及页码须与正文完全一致。本页长度1页，字体小四，章节符号及页码标识格式如上。）

有島武郎は大正期の有名な小説家、評論家であり、特に「白樺派」の代表作家として広く知られている。作家として本格的な執筆生活が極めて短く、七ヶ年足らずで終わったが、凡ての情熱を傾けて、充実した成果をあげた。戦後昭和四十年代、本多秋五氏、安川定男氏、山田昭夫氏などによって、有島の文学全体が本格的に文壇の注目を受け、多様の視点から有島文学を再認識する研究が築かれ初めた。現在にいたって、日本で「有島研究会」があり、会報を発行したり、シンポジウムを開いたりして、作家の作品や人生に関する研究活動が盛んに行われている。一方中国では、初めてその文学を中国に翻訳し、紹介した人は魯迅先生である。また新中国が成立されて以来、有島にかかわる研究は主に社会主義への関心、ヒューマンリズムの思想、リアリズムの傑作『ある女』を中心に行われてきたようである。近年来、遼寧大学の劉立善氏をはじめ、日中比較文学の視点からの研究も大きな成果を収めた。

私が有島の文学に触れたのはその『ある女』から始まったのである。激しい筆致と小説全体における切迫感がとても印象的だった。それをきっかけに有島の作品及び今までの作家研究に興味を持つようになった。有島の一読者として、まずその作品に出てきた自然、特に北海道の荒々しい風景に対する描写に深い感銘を受けた。有島の文学における自然は徳富蘆花の描き出したロマンチックな自然ではなく、国木田独歩の「繊細の詩眼」を持って、観照した「幽寂な」自然でもない。それはどうなのかについて、今まで日本では「有島は自然描写がうまい作家だった。その描写は東洋画風ではない、あくまで西洋近代絵画の迫力を持っている。客観描写に似て必ずしもそうではない」¹や、「視覚ばかりでなく、音響に対する感受性も極めて鋭敏であった」²などと主観的な感想が多いが、具体的に分析したものはあまり見られないようである。それについて検討を進めていくと、おもしろくて、やりがいがあるのではないかと、いっそう興味をそそられた。

したがって小論はまず作家の成長過程を辿り、有島自身がいかにして自然を取り入れたか、それから作品の中で、どのように表現しているのかなどを分析してみたい。こういう分析を通じ、有島及び有島文学における自然の完成を浮き彫りにさせたい。

（論文題目用 MS Mincho 小三加粗，上方空一行。其余用 MS Mincho 五号，详见例文。）

¹ 松浦武、『近代小説の表現』三、教育出版センター、1995、P 112

² 安川定男、『作家の中の音楽』、桜楓社、1998、P 61

第三章 『生まれ出づる悩み』における「海」

（章节字号用三号加粗）

『生まれ出づる悩み』は後に画家として大成した木田金太郎をモデルに書き上げたものである。小説の中には自然と人間の対立と調和までもが描き込まれていて、様々な魅力を備えた作品である。九章からなる小説『生れ出づる悩み』では海難についての描写が特に一章を占めている。漁師の海上生活を想像しながら、力強くリアルに描き出したその場面は、この小説の魅力の一つであり、作者の芸術的手腕が並々ならぬことを示しているところでもある。次は海難事件を中心に、海の登場が作品の主題体現においてどのように象徴的に描かれているのかについて見てみたい。

3.1「海」の登場（小节字号用小三加粗）

主人公の「君」は漁夫の身でありながら、絵画への未練を捨て難く、二重生活をしている人である。ある年の三月に痛ましい海難事故に遭遇した。

海の上はただ狂い暴れる風と雪と波ばかりだ。（略）力なく漂う船の前まで来ると、波の山は、いきなり、獲物に襲いかかる猛獣のように思い切り背伸びをした。

一方、狂暴の自然の真っ直中に頼りなく揉みさいなまれる人間はどうなったのか。

君達は船との縁を絶たれて、水の中に漂わねばならなかった。（略）君の心の底だけが悪落ちつきに落ち付いて、「死にはしないぞ」とちゃんと決め込んでいるのがかえって薄気味悪かった。

怒った自然の前には、人間は塵一とひらにも及ばない。人間などという存在は全く無視されている。それにも係らず君達は頑固に自分達の存在を主張した。雪も風も波も君達を考えに入れてはいないのに、君達は強いてもそれらに君達を考えさせようとした。（第六章）

人間が生命の帆をひらきあげようとする「頑固」な「主張」、「死にはしないぞ」という強烈な生命意欲は、狂暴な海（自然）の前にどんなに偉大な存在であるか、読者の心は強く打たれた。小説に述べているように、「漁夫の生活、それには聊かも遊戯的な余裕がないだけに、命がけの真実な仕事であるだけに、言葉には表わし得ないほど尊さと厳肅さを持っている」。有島は切迫感の強い筆致で、海

(自然)と人間との戦いをうきばりにすると同時に、「生死の瀬戸際にはまり込んでいる人々の本能は恐ろしいほど敏感な働きをする」ことを感じて、賛美した。

また恐ろしい自然と戦う真最中、木本は『ある女』の葉子と同じように、一瞬幻覚に耽ってしまったことに注意を払ってもらいたい。「矢よりも早く走っていく一隻の船」が真実のように彼の目に入ったのだ。それを見ると「木本は思わずすすり泣きでもしたいような心持になった」。木本の幻覚を叙述した部分で、有島はその幻の船を「矢よりもはやく走っていく」と五回も繰り返して表現している。生死の隙間に心に浮かんできたこの船はいったいどういう暗示を示すのか、やはりホイトマンと関連に言及すべきだろう。実は、船はホイトマンにとって大きな象徴的な存在である。ホイトマンが詩を書き始めるきっかけはいっぱいに帆を揚げて走る船を見た時だったと言われる。有島は次のように船から暗示を得たホイトマンのことを語っている。

大きな海原をいっぱい帆を揚げて走っていく一隻の船、それはそのまま一つの神秘であり、象徴であります。一人の Loafer なるホイトマンにとっては、その船の陸地から遠ざかっていく姿は、ある屈強な暗示を彼の魂に刻んだに相違ありません。ホイトマンの詩の中ごとに晩年の詩の中には海に乗り出して行く船を歌ったものが数篇ありますが、それらはどれも塩風の匂いを嗅ぎえるような生々とした力強い暗示を含んだ立派な詩であって、真に後世まで残るべき価値あるものであります。³

清水春雄氏の指摘では、ホイトマンの船は魂を指している。海は魂の船を走らせる場として考えられている。例えば、「船の上、その舳先に」でホイトマンは海で希望の帆を広げている舵手に、輝かしい讃歌を捧げた。

船の上、その舳先に、年若き舵取り、心して舵をひく。
海岸の霧の中に一つの鐘淋しく鳴りひびきつつ、
海原の鐘——おお警めの鐘、その響き波にゆられて、
おお、汝はまことにもまことなる警めを送る、海礁のほとりに鳴り響く鐘よ、
鳴り響きつつ、鳴り響きつつ、船を難破の地点から戒めるために、
されば心たくましく、おお舵取り、お前は鐘の警めに応ずる、
舵はかわす——荷積みした船は、進路を変えて、灰色の帆のもとに馳せて去る、
美しく気高き船は、價高き富を積み、華やかに安らかに馳せて去る、

³ 有島武郎、「ホイトマンについて」、『有島武郎全集』第八巻、筑摩書房、1980、P 547

さりながらおお船よ、不壊の船よ！ 船の上なる船よ！

おお肉の船——魂の船——帆走りつつ、帆走りつつ。⁴

若い舵手は海との戦いの中で自分の運命の舵手となる。それで彼にコントロールされた船は、「気高き船、不壊の船、魂の船」だと謳われる。ホイットマンはこのように魂の高尚、個性の力を肯定したのである。それは木本の幻覚に浮かんできたその船と並べてみると、同じ意味合いで言っているのではないかと思われる。すなわち、生と死の瀬戸際であるだけに、木本が「死にはしないぞ」と心を決めただけに、自分の魂の出航に開眼したのである。あまりの感動に「それを見ると何かが君の胸をどきんと下から突き上げてきた」。だからこそ、救助されたばかりの木本は「なんとも言えない勇ましい新しい力——上潮のように、腹のどん底からむらむらと湧き出して来る新しい力を感じ」て、そして「涙が後ろから後ろへと君の頬を傳って流れた」。なつかしい岩内の町すら「新しく生れ出たままのように立ち並んでいた」ように木本の目に映ったのだ。『ある女』の海と同じように、『生れ出づる悩み』の海もホイットマンの詩の投影があって、生死の流れが交わりつつあるところである。船の航行、つまり魂の航海は命がけの冒険の道であると同時に、真の魂を発見した冒険であり、生への復活をかけた出航である。

3.2 「海」と『生れ出づる悩み』のモチーフ

海に対する『生れ出づる悩み』に出てきた陸について、菅谷敏雄氏は「偉善と弥縫を必要悪とする日常的な人間関係の〈場〉である」のみならず、山への愛着がゆえに「超越性と包容性を兼備した、美としての自然を意味する」との指摘がある。このように捉えるとき、『生れ出づる悩み』のモチーフについて、作品の広告文で「自然は大きな産褥だ。私はその産褥の一隅につつましく坐って華やかな誕生を祝する歌手でありたい」という有島の言葉が分かってくるだろう。この小説における自然、特に海は人間と対立した存在のように見えるが、実際は新しい生命、魂の誕生が予想できる場を意味している。「産褥」であるだけに、凄まじい痛み、死の危険を内含するのが当然のことであるように、その中から生の産声が聞こえ、生の喜びが感じてくるのである。同じく木本は海との必死の戦いからしか真の魂に触れ、再生への感激を吟味することができないのであろう。

自然の恐ろしい力について、有島はかつて「自然という大きな力は、私達はそれを如何に征服し、如何に共和していくべきかをはっきりと知ることができないので常にその間に模索の生活を続けている。それ

⁴ ホイットマン。「船の上、その舳首に」（有島武郎訳）、『有島武郎全集』第六巻、築摩書房、1980、P304

は痛ましい人生の葛藤の一つだ』⁵と言った。しかし、『生れ出づる悩み』では、海の登場はむしろ人間と融合し、真の人間が誕生する場であり、悲壮、厳粛な様相を備えている。小説の最後で、有島はこのように木本のことを述べている。

君のような人が――全然都会の臭味から免疫されて、過敏な神経や過量な人為的知見に煩わされず、強健な意力と、強靱な感情と、自然に育まれた叡智とを以って自然を端的に見ることが出来る君のような土の子。

明らかに木本は自然の子のように表現されている。つづいて有島は木本の悩みについて、「君が唯一人で忍ばなければならない煩悶――それは痛ましい陣痛の苦しみである」と語っている。つまり、木本は自然と対立する人間ではなく、自然という大きな産褥から誕生する生命であり、その誕生に先立つ陣痛に悩まされた人間だと捉えてよからう。これがいわゆる「生れ出づる悩み」そのものであろう。自然は大きな産褥であるだけに、個性の人間の成長を阻害ことができず、凡ての魂の誕生への祝福を捧げるよりほかはなくなるわけである。したがって、海難に関する緻密な描写を通して有島が最も表現したかったものは、漁夫（人間）の運命に抗う果敢さではなく、過酷な自然条件を背景に輝く人間の生への執着なのである。小説の中で荒れた海はホイットマンの詩に歌われるように、新しい魂の出発するところを象徴的に描かれている。ほかに、『生れ出づる悩み』のエピグラフに掲げられているホイットマンの「炬火」という短詩が想起できる。

我が西北にあたる或る汀の真夜中に、漁夫の一群が見つめながら立っている、漁夫等の前に広がる湖のかなたには、他の漁夫等がいて鮭を突いている、独木舟、おぼろに影めいた一物、それが黒ずんだ水を横切って動いてゆく、燃え盛った炬燵をその舳先に掲げながら。⁶

「炬火」の意味についてはすでに宮野光男氏によって指摘されているが、「黒ずんだ虚無の海に浮かぶ独木船は、黒く燃え盛る焰を掲げながら、光明の世界を求めてさまよう魂の象徴である」⁷。真夜中にその舳先に燃え盛った炬火が漁夫の頼りであり、勇敢な漁夫達自身をも象徴している。海は真剣に光明へ向かう魂の旅するところとして描かれている。

さらに主人公の木本は上の主題にとって打ってつけの人物である。木本は貧しい家族の生活の為に、

⁵ 有島武郎、『有島武郎全集』第七巻、築摩書房、1980、P 424

⁶ ホイットマン、「炬火」（有島武郎訳）、『有島武郎全集』第六巻、築摩書房、1980、P 255

⁷ 宮野光男、『有島武郎の詩と詩論』、朝文社、2002、P 239

漁夫の生活を続けなければならなかった。にもかかわらず、「寝ても起きても祈りのようにこの一つの望みを胸の奥深く大事にかき抱いているのだ」。それは芸術への夢であった。有島は木本の「悩み」を自分の悩みと対照しながら、小説の最後の部分で生活と芸術の対立は、つまり個性——本能と環境とのせめぎ合いの中で、必ず真新しい個性の誕生に導かれていくと祝福している。「君よ、春がくるのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春が微笑めよかし。僕はただそう心から祈る」。このように、有島はこの小説を以って「凡て誕生を待つよき魂に対する謙遜な讃歌を歌」⁸った。

ここにたって、クリッパーの航行を歌うホイットマンの詩「大道の歌」が思い出される。

さあ行かう！ 誘引はさらに大きいだろう！

私達は水路のない荒海を航海するのだ、

私達は、風が吹き、波は騒ぎ、ヤンキー・クリッパーの快走船が

一杯に帆を張って走っている遥かな所に行くのだ。⁹

魂を乗せた船は勢いよく荒海へ走っていく。海は自由な冒険のイメージであるクリッパーと完全に融合した存在となる。一切の束縛を脱して魂の航海を始めよう、ホイットマンは呼びかけている。有島はそれに応じて、また木本に呼びかけているのであろう。したがって、『生れ出づる悩み』における海は、海難の場面は「魂の誕生」を期待する小説の主題を浮き彫りにするのに重要な役割を果たしている。人と海との戦い、木本と運命との闘争は小説の二本の主旋律となり、渾然として一体をなしている。荒々しい海は人間の輝かしい個性が表れてくる場として表現されている。一見すれば対峙した配置のように思われるが、個性の完成と融合した存在であり、いわゆる魂の誕生に先立つ「陣痛」のように描き出されている。有島が特に海難事故において筆墨を惜しまぬ意匠はここにあるのであろう。

⁸ 有島武郎『生れ出づる悩み』広告文、『有島武郎全集』第七巻、築摩書房、1980、P 361

⁹ ホイットマン、「大道の歌」、『草の葉』（有島武郎）、岩波書店、1979、P 45

おわりに

有島は自然に深い愛着を抱いている作家である。親から受け継いでいた内気な、多感な性格の持主なので、少年の有島は早くも絵心をもって自然に心の自由を求めた。後年札幌農学校とアメリカで、それぞれ激しい入教体験をした時にも、ホイットマンとの精神的な出会いの時にも、自然との語らいが絶えることなく行われてきた。

自然描写は有島の小説においては単なる背景と見なすことはできず、荒い筆致の中で主人公とともに生きている存在なのであり、主人公の内面、即ち有島の本能的な生活への追求と深く関わりつつ、人間の本能的意欲を鮮烈に浮かび上がらせる役割を果たしている。例えば、放埒な大海原の呻吟を聞き取れた早月葉子の心には再生の欲望が再び立ち昇りつつあった。狂暴な海に遭遇した木田の心には「死にはしないぞ」と強く自我の航程を主張した。怒濤のような風に吹かれても、荒れ狂った嵐の中に身を置かれても、葉子も仁右衛門も力のあらん限り運命と戦った、永遠に戦った。葉子の激情、木田の執着、仁右衛門の狂暴、有島は自然の中でそういう人物を塑像し、従来のも徳、社会秩序との格闘を通じて、分裂していく人間群像をあらためてとらえ直そうとした。有島はその人達の本能的な意志力に、何より強く心を引かれ、それを雄大な自然とともに表わしてきたのである。自然描写から有島が「本能的な生活」を追求する人間であり、「愛」によって人生を生き抜こうとする誠実な作家の姿が伺えよう。したがって、有島の作品における自然をいかに読み取るのかが真に有島の人と作品を理解する上での一つの鍵だと言えよう。

小論は有島の人と作品から、有島の「自然」について分析してきた。その作品の自然描写が作品に一貫する主題——人間の内的自然、つまり本能への尊重と離れがたく融合し、定着していることが明らかになるだろう。有島の「自然」から、有島は無類の誠実さを持っている作家であり、有島の文学は「書かんが為生活した人の作品ではなくて、生きんが為生活した人の作品」¹⁰であることをうかがうことができる。生命に対する真摯な態度、社会に対する良心的な関心を抱きつつ、有島は自己の作品及び人生の世界で彼なりの完成を示しているのである。ここで私はその一読者として心から敬意を捧げる次第である。

¹⁰ 内田満。『有島武郎—虚構と実像』。有精堂、P42

参考文献

日本語の部分:

1. 有島武郎. 『有島武郎全集』. 筑摩書房, 1980 年
2. 本多秋五. 『白樺派の文学』. 講談社, 1954 年
3. 安川定男. 『有島武郎論』. 明治書院, 1960 年
4. 宮野光男. 『有島武郎の詩と詩論』. 朝文社, 2002 年
5. 『草の葉』 (有島武郎) . 岩波書店, 1979 年
6. 内田満. 『有島武郎――虚構と実像』. 有精堂, 1997 年

中国語の部分:

1. 刘立善. 《日本白桦派和中国作家》. 辽宁大学出版社, 1995 年
2. 李野光. 《惠特曼名作欣赏》. 中国和平出版社, 1995 年
3. 朱光潜. 《西方美学史》. 人民文学出版社, 1981 年

(注意中文与日语书名号的不同)